

<研究報告>

日本の先祖祭祀と仏教 <後編>

橋口豊彦

—新宗教と先祖祭祀—

前編では、現在、日本における仏教の在り方が見直されるべき時に差し掛かっていることを概観した。

特に、近年、日本の寺院の多くが檀家の寺離れと、葬儀形式の多様化によって、将来的な存続の危機に直面している問題と、その遠因が、本来個人個人の覚醒を旨とする仏教が、安定した生活の保障を目的とする古来の祖霊信仰の伝統に取り込まれてしまい、仏教としての役割を十分に果たして来られなかったことにあることを見てきた。

本編では、そのような伝統仏教だけでなく、近年台頭してきた在家による仏教修行を旨としたいわゆる仏教系新宗教も、古来の祖霊信仰の発想と枠組みを打破し切れていない現状を見て行きたいと思う。

○祖霊信仰と仏教との関係

前編では、日本における伝統仏教は祖霊信仰において取り残されていた問題を解決し補完する形で人々に受け入れられていった可能性があることを見てきた。

上述の通り本編では新宗教と祖霊信仰との関係を見ていくが、その前に、前編の繰り返しにはなるが、もう一度、祖霊信仰の本質と仏教との関係について重要なポイントを再確認しておきたいと思う。

古来人類は安定した食料供給と生活の保障を願い、それを左右すると信じた自然神などの目に見えない存在を祀り、加護を願った。

農耕が始まってからは、耕作地を開拓した始祖と、始祖によってもたらされた生活手段を継承・管理運営する為の系譜集団の役割が重要性を増した。日本ではそれを「家」とよんで、その繁栄と永続が第一義とされるようになった。

その家の系譜集団に繋がる人々は、死後、集合的な「祖霊」となり、その祖霊は古来の自然神信仰とも結びついて農作物の生育状況やそれに影響を与える自然現象までも左右し、さらには系譜集団に属する人々の生活状況にも影響を与えると信じられるようになった。

このような、祖霊信仰の風習は洋の東西を問わずアフリカからアジアまで、一宗教が普及する以前はおそらく世界各地に見られたと考えられることから、日本でも

有史以前からの風習であったと思われる。

現在でも世界各地に残存している祖霊信仰に共通している特徴は、順当な死に方をして、子孫によって正しく祀られた者は、その魂はやがて集合的な「祖霊」へと溶け込んでゆくが、事故死や変死をした者や、子孫によって正しく祀られなかった者は、祖霊にはなれず、永遠に浮遊霊として彷徨い、時には生者を悩ますと考えられていることである。

多くの場合、各部族には祖霊信仰におけるメッセンジャーとしてシャーマンが存在するが、彼らはそれらの浮遊霊を生活圏から排斥しようとはするが、彼らを救うことはしない。何故なら、彼らの目的は「安定した食料供給と生活の保障」を願う為に正しく「祖霊」を祀ることであって、死後祖霊になる以外に死者が休まる場所が他にあるとは考えていないので、手の施しようがないのである。従って、この浮遊霊の存在は祖霊信仰においては、目的外ではあるがそれゆえに対応も手薄な厄介な問題であったのである。現代のタイの山間少数部族における祖霊信仰の研究でも、このような祖霊になれなかった浮遊霊が仏教僧によって救われたという逸話が報告されている^①。

先にも述べたとおり、祖霊信仰が「安定した食料供給と生活の保障」を目的とするのに対して、仏教は個人の覚醒と魂の救済を目的としている。祖霊信仰において取り残され見捨てられた存在が、仏教僧によって救済されるという構図は、仏教が外来宗教として輸入された古代の日本においても同様に見られたようである^②。

日本に仏教が伝来して以降、仏教僧が彷徨える死者の救済と鎮魂に活躍したという記述は、様々な文献に数多く見られる。これは角度を変えてとらえれば、仏教の僧侶達は祖霊信仰において対応が手薄だった部分を補完する形、つまり、祖霊になれなかった浮遊霊を救済するという役割を人々から期待されて、葬送儀礼においても重要な役割を果たすようになったと考えられるのである^③。

その事が、今日に至るまで、伝統仏教が葬式仏教と言われ、人々を仏教において教化するというその本来の目的よりも、もっぱら葬儀の中心的な担い手とされていてしまっている遠因のように思われる。

蛇足にはなるが、日本の仏教は伝来後まもなく国家レベルでのサポートを受けるようになったが、その目的は東大寺・国分寺の例を見ても分かるとおり「鎮護国家」であり、災いをもたらす目に見えないものを鎮める為であった。

つまり、聖徳太子の十七条憲法などの例外を除けば、日本の仏教はその教義そのものよりも、国家レベルでも「災いを鎮める」という祖霊信仰的な発想からの役割の方を期待されていたということである。

このように、昔も今も、日本人にとっては、一部の例外を除き、古来の祖霊信仰の目的であった「安定した食料供給と生活の保障」ということが、あらゆる宗教儀礼の第一義の目的であって、縁起の理法に目覚めるなどという仏教本来の教えなど

二の次だったということである。

海外からは多くの国民が仏教徒であると思われる日本ではあるが、その内実は、本来の仏の教えが十分に浸透したとはとても言えない状況にあることは否定できないであろう。

○現世利益と新宗教

それでは、新宗教においてはその状況は変わったのであろうか？

昭和初期から戦前にかけて登場した仏教系の新宗教は、檀家制度に依存する伝統仏教とは逆に、都市化とそれに伴う檀家離れを補完する形で戦後急速にその勢力を伸張した。

しかし、現在その勢力の伸張が止まり、一般社会に対する影響力の低下が目立つものがある反面、その宗教的排他性と政治的影響力の大きさによって社会から警戒され冷ややかな目でみられている教団もある。どちらにしても、それらは押しなべて“現世利益志向”が強く、現世利益が得られることがその勢力伸張の大きな要因であったことは否定できないように思われる。

ここで言う“現世利益志向”とは、あの世での救いに対比されるところの現世での救いを求めるということの意味するのではない。釈尊の説かれた、人格的完成を目指して現実の中に縁起の理法を見出しながら人間的な成長を心掛けて生きるという仏教的な姿勢を二の次にして、“超自然的な力に頼んで自らにとって不都合な現実的な諸問題を除去し、願望の成就を願う姿勢のこと”である。つまり、現実の諸問題から自らの在り方の問題点に気づき、自分の在り方・行動を改めることによって、同じ問題が起きないように心掛け、より良い生き方を希求するというのではなく、問題そのものの除去と願望の成就を主眼とするため、自分の在り方を見直すという姿勢が希薄で人間的な成長には繋がりにくい心的性向を、ここでは“現世利益志向”と称することにする。

そのような必ずしも自らの人間的成長を前提としない“現世利益志向”というものは、“超自然的な力による問題の除去と願望の成就を願う”という原始的な“呪術”以来の発想であり、そういう意味では「安定した食料供給と生活の保障」ということを本願とする古来の祖霊信仰と軌を同じくする発想であると言える。その点を考えると、それらの仏教系の新宗教が、古来の祖霊信仰の発想と枠組みを打破して仏教本来の目的を達成できているとは思えない。

ここでは、霊友会という仏教系新宗教を一つのサンプルケースとして、現在の日本の仏教系新宗教が抱える問題点を分析し、そこでの祖霊信仰の影響についてみてみたいと思う。

霊友会をサンプルケースとして取り上げた理由は、それが日本における仏教系新宗教の源流の一つを成したと言えるものであるからである。

尚、著者自身がその実態に身近に触れる機会に恵まれたという経緯がある為、以下に述べる内容には著者が実際に見聞した事に対する個人的所感も含まれていることを申し添えておきたい。

○霊友会と久保角太郎

昭和初期に創立された霊友会は、その後多数の分派を生み出し、日本の仏教系新宗教の中の一つの草分け的存在となった。

その創立者の久保角太郎は、1892年千葉県小湊の漁村で生を受けた。特に恵まれた家庭環境ではなかったが、大工の見習いをしながら工手学校に通い建築技師となって宮内省に勤務していた。そこで、その実直な性格と勤勉さが認められ上司である仙石子爵より跡取りを探していた旧家である久保家の養子へと推挙された。そして、その久保家を守っていた先代の妻久保志んの養子となったが、久保志んは潔癖症な上に、「毎夜半1時を期して定期的に悪夢に犯されて」というような難しい問題を抱える人だった^④。幼くして実母と死別していた角太郎は、志んを実母のように誠意を尽くして介護したが、その頃より人間のこころのあり方についての関心を徐々に深めていった。

興味深いことに、それ以前の角太郎は、社会問題特に労働問題に大きな関心を抱いていたようである。しかし、「当時の思想が労働者のみに止まらず、一般的に著しく悪化してきたので、心機一転して法華経の研究を始めることにした。」^⑤ということである。

ここで、角太郎が言う、労働者のみに止まらず、一般的に著しく悪化してきたというのは、角太郎が勤務していた宮内省の役人の姿を見て「陛下の前に行くと蛙みたいにお辞儀をし、・・・蔭へ行っては陛下の悪口を言ったり、舌を出したり、娑婆というところはなんて汚い所なんだろう。こういうふうには、これからだんだんと進歩してくる世の中には、人間が人間の顔をしていても、畜生のような行いをするんだ・・・」^⑥というふうに、人間のこころの在り方を正すことの方が、社会の構造を正すことよりも、より重要な課題であるということに思い至ったことを意味している。

角太郎が最終的に法華経に辿り着いた詳しい経緯については定かではない。角太郎の実家の松鷹家は浄土真宗の檀家だったが、祖母は熱心な日蓮信者だったようである。また、角太郎が後に自分の出生地が日蓮聖人と同じ千葉県の小湊であるということ強く意識した発言を何度もしていたことも確かである。養子に入った久保家は浄土宗の檀家だが義母になった久保志んは日々観音経をあげており、角太郎も一緒にあげていたという。

いずれにせよ、一つの要因と言うよりも、さまざまな出来事や出会いをきっかけとして、最終的に法華経にたどり着いたと思われる。

そして、角太郎がちょうど久保家の養子になった大正9年（1920年）前後、親戚筋の縁で、当時、巷で無縁仏を含む万霊供養を実践していたとされる西田無学の活動について知る事となる^⑦。

○西田無学の万霊供養

西田無学（1850－1918）とその弟子たちは横浜・東京周辺の墓地を回り、誰からも顧みられることなく無縁仏になってしまった墓を掃除し洗い清め、新たに戒名を付け直して供養した。戒名が社会的地位やお布施の額によって格差をつけられるのが一般的であったのに対して、西田のように、誰に対しても差別なくしかも無料で戒名をおくって経を誦読するというやり方は画期的な事であったと思われる。

久保角太郎はそのやり方に大いに啓発された。久保角太郎が西田無学の存在を知った頃には、西田本人はすでにこの世を去っていたが、弟子の増子酉治がその活動を引き継ぎ、角太郎はその増子から西田の活動を知る事となる。

久保角太郎は、彼ら西田無学の弟子達の活動に啓発されはしたが、それをそのまま踏襲しようとはしなかったと思われる。それを示唆するものがある。

西田の遺したグループで使用されていた経巻は無量義経と仏説観普賢菩薩行法経を中核としているもので、現在も霊友会系教団に伝わるいわゆる「青経巻」の原型ともいえるものであった。そのオリジナルともいえる明治45年の初版では「回向唱」という部分に「有縁無縁の諸精霊」という記述が見られる。しかし、大正13年に久保角太郎が施主者として増刷したものには、この「有縁無縁の諸精霊」という記述が削除されているのである。

この一見些細なことに見える改変に、久保角太郎の意図するものが垣間見えるように思われる。

では、西田の遺した活動とそれに啓発されて角太郎が独自に目指したものの違いは何か？先ずはその点を検討してみる。

○守護を求める古来の祖霊信仰と利他行としての西田の先祖供養

西田無学にとっての先祖供養とは、それまでの伝統的な祖霊信仰とは、意図も目的も違うものであった。先にも述べたように、伝統的な「祖霊信仰」の目的は、自分達に生活手段をもたらしてくれた系譜である「家」に繋がる「祖霊」を祀ることによって、自分達が祖霊から「安定した食料供給と生活の保障」をしてもらうことであった。つまり、祖霊に守護してもらうことが目的であった。

しかし、西田無学の先祖供養は、守護してもらうためではなく、法華経の常不軽菩薩の精神を身を以て実践する菩薩行として、一人でも多くの迷える衆生（亡者）に経を聞いてもらい、仏弟子としての戒名を送って、迷いから脱してもらうことを願ってのものであった。

○自己確認としての久保角太郎の先祖供養

久保角太郎も、この点においては、西田無学に大いに啓発され共感したようである。しかし、久保角太郎は菩薩行というものをただひたすらな利他行とはとらえていなかった。

角太郎のその後の言動から推察される彼の菩薩行の捉え方は、法華経の大きなテーマでもある、自らの在り方を徹底的に認識しそこから自分なりの道筋で一步一步自己改革の道を歩み、そのやり方を縁のある他者とも共有すること、ということである。

角太郎にとっては、先祖とは自分という存在に繋がる父方の系譜と母方の系譜の双方の先祖であり、それらすべての先祖が今の自分の在り方に影響を与えており、それら双系の先祖との繋がりに思いを馳せその影響を自らの内に自覚することが自らの在り方を認識することの出発点となると彼は考えた。

そして、今の自分の行動を改めることが、双系の先祖からの繋がりの連鎖をより良いものにしていくことになり、それが本当の意味での先祖の供養になると考えたわけである。

つまり、久保角太郎にとっての先祖とは大きな意味での自分自身であり、その大きな意味での自分自身である自らに繋がる双系の先祖に思いを馳せながら法華経を読誦するという行為は、自分自身に法華経を聞かせ、自身の在り方そのものに縁起の理法を覚知することに繋がると彼は考えたのである。そして、その覚知つまり「気づき」をもって自らの日々の行いを改めることを「因縁解決」「懺悔滅罪」と呼んだ。このように久保角太郎においては「先祖供養」と後に霊友会でも強調された「根性を直す」こととは表裏一体のものであった。

また、そのやり方を自分に縁のある他者とも共有することによって、その他者もまた自らの双系の先祖に思いを馳せながら法華経を読誦し、自身の在り方に縁起の理法を覚知し、日々の行いを改め「因縁解決」「懺悔滅罪」できるようになると彼は考えた。これを後に霊友会では「導き」と呼ぶようになる。

そして、そのような法華経による双系の先祖の供養というやり方を通じた、各自それぞれにおける縁起の理法の覚知のプロセスが人から人へと共有されて行き、その過程での気づきが互いに話し合われることによって、法華経の説く「法が語られる場」が自然に生まれ、すべての人が互いに法師となって仏の教えをより多くの人に伝えていく、という法華経の菩薩行の理想が実現できると角太郎は考えたものと思われる。

○自己確認の象徴としての総戒名の創案

久保角太郎は、そのような自己確認としての双系の先祖の供養の為のシンボルとして、総戒名と言われるものを創案した。これは、父母双系の先祖すべてに対して

送られるシンボリックな戒名とも言えるもので、自分に繋がる全ての先祖が自分自身とともに仏の教えに目覚めて行くことを祈念するためのものである。前述したとおり、それは双系の先祖全てとの繋がりを象徴するものであると同時に、より大きな意味での自分自身の象徴でもあるわけである。

このような形式と趣旨をもった総戒名というものは、西田無学のグループには存在せず、久保角太郎はこの独自の総戒名の創案によって、それまでの西田による万霊供養という無限定で壮大な利他行としての意味合いの強かった西田流の先祖供養を、より身近で現実的な自己確認としての意味合いの強い先祖供養へと大きく方向転換したと言えよう。

○誰にでもできる在家の菩薩行の確立

先に見たとおり、角太郎は西田の遺した経典の中にあつた「有縁無縁の諸精霊」という部分を削除した。そして、自身に繋がる双系の先祖を象徴する総戒名というものを創案した。これによって、角太郎は法華経による先祖の供養という行為を自身の在り方そのものに縁起の理法を覚知しようとする行為へと体系付け、そのやり方を他者とも共有することによって、まさに「我らと衆生と皆ともに仏道を成ぜん」という法華経の理想とする菩薩行へと昇華させようとしたと言える。

西田のように見捨てられた死者をも差別なく供養するという正に法華経の常不軽菩薩の精神を地で行くような利他行のあり方もあるが、それは誰でもが容易に成し得る事ではない。それに対して、今生きている一人でも多くの人に、自らのうちに縁起の理法を覚知するというやり方を示して共に菩薩道を歩もうとするやり方は、その広がり方の可能性としては法華経の説く「菩薩が仏の教えを無限に広げていく」という理念に近いのかもしれない。

先の「有縁無縁の諸精霊」という無限の数の諸精霊を、西田のようなカリスマを持った特異な人物やその弟子達が細々と供養するよりも、角太郎が創案した総戒名という自らに縁の有る双系の先祖をそれぞれの子孫が供養し、そういうやり方の輪が無限に広がっていく方が、永続性においても広がりにおいても、はるかにより多くの衆生と諸精霊を仏道へと誘う事ができると角太郎は考えたのであろう。つまり、角太郎は無縁仏を供養するより、無縁仏を無くしていく方法を考えたとも言えるかもしれない。

このように、西田の方法論は、普通の人にとっては、無限の数の諸精霊を供養するというあまりに負担が大きすぎる現実的とは言いがたいものであったが、角太郎はそれを各自が自分に繋がる先祖の供養をするという現実的な方法論に置き換え、それによって、誰もが参入できる、より普遍性のある在家の菩薩行の道を開こうとしたと言える。

○菩薩行より現世利益

しかし、そのような角太郎の高邁な理想とは裏腹に、かつての平安貴族の関心が仏教の教理よりも、より現世利益的な成果をもたらす密教的な加持祈祷の方であったように、昭和初期の人々の関心も在家の菩薩行の実践ということよりも、より現実的な問題解決の方に向けられていたようである。

貧困と病気に喘ぐ昭和初期の庶民にとっては、現実的問題の解決の方が、他のどんなことよりも最優先課題だったであろうことは容易に推測がつくし、また、そのような人々のニーズに応えることが、当時の宗教者に求められていた最大のテーマであったということも否定できないであろう。

そして、そのようなニーズに応える形で、宗教者側が現実的な成果をもって応えるという構図は何時の時代、どこの国にも見られるものである。

どのような形であれ、人々の現実的な苦悩を和らげ、より健全で前向きな生き方の一助となることは、立派な菩薩行の一環であるし、否定されるべきことでは決してない。

問題なのは現世利益自体が目的化してしまうことと、人々がそのような結果をもたらす能力のある人に依存し、また依存された側が特別な権威を持つに至ることである。

○南千住霊友会

角太郎も当時の人々の現実的苦しみに対して、法華経とシャーマニズムの手法を融合させる形で応えようとし、当初、シャーマンである若月チセと共に南千住霊友会を立ち上げた。しかし、若月チセにはシャーマン権威主義的傾向が見られ^⑧、角太郎の理想とする誰もができる菩薩行という基本理念には相容れない性向が見られた為、やがて袂を分かつことになる。

とは言え、角太郎は若月チセのシャーマンとしての能力を目の当たりにして、人間の持っている潜在的な能力の可能性を確信したと思われる^⑨。

○小谷安吉・小谷喜美との赤坂霊友会

角太郎は、そのような能力は一定の修練を経ることによって誰にでも習得可能なものであると信じていた^⑩。法華経を熟読していた角太郎にとっては、仏や菩薩の能力として自分や他人の過去世の様子まで見通す力があることが挙げられていることは知っていたはずであるから、菩薩行の一環としての修行の中にそのような能力の習得の必要性を感じていたのかもしれない。

それに対して、若月チセには自分の特殊な能力に人々が頼ることを良しとする傾向があり、皆が自分と同じような能力をもつような修行をすることには乗り気ではなかったようである^⑪。

角太郎は、修練によって誰でも特殊な能力が習得できることを証明する意味でも、当時は全くの部外者であった兄嫁の小谷喜美に白羽の矢をたてた^⑩。

角太郎の兄である小谷安吉は、ともに西田の残した活動に参加するなどして、角太郎と行動を共にしていたが、すでにその頃から角太郎に宗教的なカリスマ性を感じていたらしく、兄であったにもにかかわらず弟の角太郎を師として敬い、言葉遣いも丁寧だった^⑪。

その様子を傍から見ていた当時の小谷喜美は「兄弟のくせに馬鹿げている」と初めは嘲笑していたが、生来負けん気が人一倍強かった小谷喜美は、義弟から自分達兄夫婦に申し付けられた様々な修行をいちいち反発しながらも、完璧にやってのけた。

その過程で、角太郎の思惑通り、小谷喜美は様々な体験をし、安吉とともに徐々に特殊な能力を開花させ始めるのである。

このように、角太郎と小谷夫婦によって赤坂で始められた活動は、やがて赤坂霊友会と呼ばれるようになり、若月チセらの南千住霊友会や一時は角太郎と行動を共にした戸次貞夫を中心とする福島霊友会との三つの霊友会が並立することになる。

○菩薩としての精神修養

先にも触れたが、角太郎は各自に繋がる父母双系の先祖全ての象徴である総戒名というものを創案し、その大きな意味での自分自身の象徴を意識しながら、法華三部経の抜粋からなる「青経巻」や法華三部経そのものを読誦し、自覚的な日常生活をおくることによって、自分の在り方の中に縁起の理法を覚知しようとするいわゆる“自己確認のための先祖供養”の方法論を確立した。そして、それが霊友会の会員にとっての基本的な活動となった。

そのような基本的な活動に加えて、角太郎と小谷夫婦は、霊界つまり精神世界の声を聴くための「靈感修行」や、こころの魔を払うための「究呪の修行」、自分たちが過去から行ってきた様々な行為とそれがもたらしたしがらみの数々を見極めて相応の対処の仕方を知るためとされる「陰の修行」、人間だけでなく動植物も含めたあらゆる存在に対しておくる法名などの方法論を確立していった。それらの方法論は、自分の過去からの行いを反省し、償い、これからの生き方を改めていくためのものであった。

それらの方法論を確立していく過程で、角太郎の指導のもとで小谷夫婦は断食修行など過酷な修行をつづけたが、元々病弱であった小谷安吉は体力が尽き、しかし、すでに習得していた特殊な能力を持って自らの死期の日時まで周囲に連絡してその通り他界したという逸話が残っている^⑫。

○霊友会発会式

安吉の死後も、小谷喜美の激しい修行は続けられた。そして、1930年には、小谷喜美が会長、久保角太郎が理事長として、三つの霊友会合同で正式に霊友会として発会式を行ったが、結局、若月と戸次らは合流せず、それぞれ後に別団体として袂を分かっていくのである。

その後、久保角太郎と小谷喜美を中心とする霊友会の活動は急速に拡大していくことになる。在家による法華経の菩薩行の実践という高邁な理想を掲げて新たに再出発した霊友会ではあったが、先にも述べたとおり、当時の庶民は、あいかわらず医者にかかるお金にも困る人が多く、花より団子と言うように、菩薩行より病氣直しに関心のある人の方が圧倒的に多かった。

角太郎と小谷夫婦によって本来菩薩行の一環として自己の在り方を改めていくために確立されたはずの靈感・究呪・陰の修行などの方法論も、自己の在り方を改めるよりも、問題そのものを取り除くために応用されることの方が多かったということである。

○誰でも教祖の危険性

人々は、霊友会の修行によって奇跡的な成果が得られると信じ、そのような噂は人から人へと広がり、日本各地に急速に広まっていった。しかも、それまで一部の僧侶や修験者の専有物であったような超日常的な能力の開発の仕方を、霊友会の主要会員たちはどんどん習得していった為、その気さえあれば、誰もが教祖になりうるだけの超日常的な能力を身につけてしまったとも言える。

霊友会が他の教団ではありえないほどに、分派を派生させてきた主な要因は、このことにあると思われる。つまり、霊友会の修行は一通りの事を習得してしまえば、ある意味完結しており、もはや誰に頼る必要もなく、自分と精神世界とのコミュニケーションによって必要な情報を得るようになる為、誰でも教祖に成り得る可能性を秘めていたのである。

○分派・分裂の多発

事実、霊友会から分派した団体は主なものだけでも十数団体を数え、それらのいわゆる“霊友会系教団”の宗教年鑑での公称会員数を単純に合計するだけでも一千万人を超えてしまうほどである。このように、霊友会が戦後の日本の仏教系新宗教の主要な母体の一つとなったのは間違いないが、それほどの分派を生み出す要因にもなった“誰もが教祖に成り得る”という所が、同時に霊友会の最大の問題点であったとも言える。

○創立の趣旨徹底と教条主義排除との矛盾

久保角太郎が意図したのは、誰もが在家の菩薩になることであった。その為には一人一人が完結した修行方法を習得し、最終的には誰に頼ることもなく、精神的に自立できなければならないと彼は考えた。そういう意味では、角太郎たちの確立した方法論は画期的な可能性を秘めていたとも言えよう。それは、特定の特異な能力を持つ教祖に信者全員が頼るという宗教とは、真反対の指向性を持っていたとも言える。

しかし、角太郎の意図したような法華経による在家の菩薩行の実践という創立の精神を組織の上から下まで徹底して行くということと、各自が一人一人精神的に自立していくということとはある意味矛盾する面があり、各自の主体性が重んじられれば重んじられるほど、創立の精神までもが各自なりに解釈され直されてしまうという面が少なからずあったと考えられる。

事実、霊友会は、各自の精神的な自立を促すために、個人一人一人の自らの体験を重んじ、理屈だけで分かったつもりになる事を避ける為に、敢えて教条化された「教義」というものを提示せず、「人を見て法を説く」というポリシーを貫いた。

そのようなポリシー自体は、釈尊の基本姿勢に忠実に従ったものであり、本来、画期的であるとさえ言えるものである。しかし、その画期的なポリシー故に、人から人に伝わるうちに、様々な独自の解釈が入り込む余地を残してしまったとも言えるのである。

○現世利益誘導主義の横行

もともと、角太郎が意図した法華経による在家の菩薩行の実践という目的は、仏教の研究者ならともかく、一般人にとってはなじみは少なく、その意義を理解するのも容易ではなかった。そのため、その目的を正面から訴えても一般受けすることはなく、ましてや、それを組織の末端にまで徹底することは非常に困難だったようである。

それよりも、先祖を供養すれば、病気も治り、商売も繁盛するといった現世利益を売りにする方が遥かに受けが良く、実際にそのような現世利益誘導型の勧誘の仕方をした者の方がより多くの会員数を誇るという皮肉な現象を生み出した。

著者自身も“難しいことを言っても結局は導けなければ意味がない”というような発言を会員活動の現場で度々耳にすることがあったし、またそのような考え方で沢山の人を勧誘した人が会員数を背景に組織の中での発言力を増すという傾向が見られた。

そして、本来“気付き合い向上し合える生き方を他者とも共有する”という趣旨であった“導き”という言葉も、単なる勧誘活動と同じような意味で使われる事が多くなった。

〇こころの眼を開く為だったはずの靈感修行

また、前述した角太郎たちが菩薩としての能力を高めるための一環として取り入れたいわゆる靈感修行、つまり第六感的能力を磨く修行も、本来自らのこころを磨きながら行われることが前提であった。久保角太郎や小谷喜美が在世中は、幹部達に靈感修行をさせて、修行の足りなさを思知らせる機会が度々あった。

つまり、靈感などというものは砂の中から砂金を見つけ出すように、百の雑念の中から一つの貴重なひらめきを見つけ出す能力を鍛錬するのがポイントであって、ただの雑念を靈感であると勘違いしてしまう危険の方が多いいことを角太郎達は幹部に自覚させようとしていたのであった。

従って、角太郎達が意図した一連の靈感・究呪・陰の修行は、基本的には自分自身の精神的な成長と並行して行われるべきもので、自らのあり方に関する貴重なひらめきをそれこそ砂の中から砂金を探すような地道な心構えを持って修得していくことを本来の目的としたものであったが、その趣旨は徹底されたとは言い難く、実際には“未熟な靈感師”を量産することになってしまったと言っても過言ではあるまい。

〇街の行者のようにふるまう会員の横行

街の行者が庶民の病氣直しに活躍したように、霊友会の修行を通じてある程度の能力を身につけた者は、周りの人々や会員から頼りにされ、病氣直しを依頼されたり、様々な問題解決の為のいわゆる前世療法的なアドバイスを乞われたりした。そして、頼られた方もその気になって、教祖のように振る舞うというような傾向が少なからずみられた。

そこには、前編でも述べた原始の時代より人々が抱き続けてきた、目に見えない存在に対する怖れ・不安とその裏返しとしての過剰な期待という人間の不安心理が反映されており、またそれに便乗しようとする側の安易な姿勢が見受けられる。

霊友会に於いても、現世利益自体が半ば目的化し、シャーマン的能力をもつ先輩会員に人々は頼り、自ら思考することをおろそかにするという正にシャーマン権威主義の典型が少なからず横行するようになってしまった訳である。

それらはどれをとっても、本来の仏教思想からも久保角太郎の当初の趣旨からも大きく逸脱するものであったと言える。

〇根強い祖霊信仰の発想

以上の霊友会の例を見て分かることは、久保角太郎の発想した「在家による法華経の菩薩行の実践」という高邁な理想にも関わらず、それを受け入れる側の人々の基本的欲求と宗教観は、有史以前からつづく祖霊信仰の発想そのままだったということである。

霊友会が急速に人々の間に受け入れられていったのは、その菩薩行の理想のためというよりも、それまでお金を払って僧侶に依頼していた“先祖の供養”というものを、自分自身で毎日できるようになるということが一番の魅力であったと思われる。

そもそも僧侶に先祖の供養を依頼する風習自体も、仏教的な発想というよりも、古来の祖霊信仰の発想である「正しく先祖を祀れば、先祖が自分達を守護してくれる」という発想がより主要な動機であったことを前編でもみてきた。

又、祖霊になりきれずに浮遊霊になってしまった先祖がいたとしても、僧侶による供養によって、自分達に災いをもたらさないようにできるという利点もあった。

このように、仏教の僧侶も、人々が古来より厳然として固持し続けてきた祖霊信仰の枠組みの中で、都合のいいように利用されてきた面があることは否定できない。霊友会が、一時期人気を博したのも、もはや先祖の供養を僧侶に依頼する必要もなくなり、自分たち自身で「正しく先祖を祀り、それによって先祖の守護が得られる」し、万が一浮遊霊になってしまった先祖がいても、シャーマン的手法をもってその状況を把握し、確実に満足してもらい、自分達に災いをもたらさないようにできるからというのが大方の動機であったと考えられる。

このように、創立者の本来の意図と趣旨が正確に伝わらないまま、むしろ方便として黙認していた伝え方が本来の趣旨であるかのごとく霊友会の方法論は人々の間にどんどん普及していったものと思われる。

それは、仏教の僧侶が、その本来の役割とは違う形で人々の祖霊信仰の枠組みの中で利用されるようになったのと、非常によく似た構図であると言える。

久保角太郎が意図したものは法華経による在家の菩薩行の普及であったが、実際に会員の多くが求めていたものは、自分で出来る祖霊信仰とそれによって先祖の守護を得ることであり、また、様々な災いをもたらす浮遊霊をシャーマンである先輩会員の“指導”に従って“成仏”させることであった。

もちろん、本来の仏教的考え方が会員間に普及しなかったわけではないが、現実の様々な問題の原因は、先祖の悪業や自らの過去世の悪業によって引き起こされており、それらの“因縁”を“成仏”させれば、今の問題も解決するというように「因縁」と言うものがあたかも「浮かばれない浮遊霊」のような存在で、その浮遊霊を満足させれば災いも無くなるというように、仏教的な言葉を使いつつも基本的には祖霊信仰の発想から抜けきれない会員が大多数であった。

〇見るも因縁、聞くも因縁

久保角太郎は再三にわたり、「見るも因縁、聞くも因縁」ということを強調していた^⑤。これは、自分が経験することは全て自分自身のこれまでの在り方や生き方に照らし合わせて解釈されるべきで、そこから必ず自分自身について学ぶべきことに気付けるはずであるということの意味していた。この発想こそ、仏教の基本原則であ

り、この発想抜きには仏教たり得ないというほどの重要なポイントであると言える。

「因縁」とは端的に言えば「関係性の展開プロセスに於ける原因と条件」であり「因縁解決」とはその「関係性の展開プロセスの原因と条件をより肯定的なものへと改善していくこと」に他ならない。そして、自分が経験するすべての事は「自分に関わる因縁」に他ならずそれは「自分自身の在り方に関わるあらゆる関係性の展開プロセスの原因と条件」である故に、良くも悪くもその展開の仕方は自分自身にかかっており、そういう意味では自分が経験することで他人事というものは原理的にありえないというのが、仏教的発想の原点であると言える。

久保角太郎もこの一番重要なポイントを幹部会員達に徹底しようとしたが、ある程度までは伝わりはしたが、どうしても旧来の祖霊信仰的な発想が根強く、「結局は全部が自分自身の問題である」という基本認識が徹底されたとは言い難い。

本来ならば、「悪い因縁」＝「自分自身の在り方の問題」であり、「悪い因縁の解決」＝「自分自身の在り方を改めること」であるはずが、どうしても祖霊信仰的に「悪い因縁」＝「災いもたらす浮遊霊のようなもの」で「悪い因縁の解決」＝「災いをもたらす浮遊霊を成仏させる」という発想から抜け切れない会員の方が多かったということである。

○仏教修行と祖霊信仰との境界線

自分に関わる因縁とは自分自身の在り方に関わることという基本認識がしっかりしていれば、それを改善するには、自分自身の在り方を変えて行くしかないということは自明になるはずだが、因縁というものを何か自分とは別の存在物のような祖霊信仰的なとらえ方をすることによって、それをどうにかできるのは、シャーマンを通じてであって、霊友会におけるシャーマンとしての先輩会員に御願ひして因縁の成仏の手助けをしてもらうという構図が出来上がってしまうのである。

このような受け止め方のずれが、仏教修行になるか、祖霊信仰の延長になるかの分かれ道になっていて、実態としては、在家の菩薩行としての仏教修行が出来ている会員よりも、祖霊信仰の延長として霊友会をやっている会員の方が遥かに多かったと思われるのである。

○仏教の名を借りた祖霊信仰

また、霊友会ないし霊友会系以外の、先祖の供養と言う方法論にはよらずに、自分と仏とが直接向き合うことを標榜した団体においても、前編でも述べたとおり、実態は、祖霊が永遠の仏に置き換えられただけで、その目的とするところは「現世利益」つまり古来の祖霊信仰の「安定した食料供給と生活の保障」という目的をそのまま引ずっている実態があるように思われる。永遠の仏からの守護と生活の保障を期待して行じ、その成果に魅せられて人から人へと広がっていった面があること

は否定できないと思われる。

そもそも、仏を「宇宙的大生命」ととらえる事自体が、本来の釈尊の教えにそったものであるかどうか議論の分かれるところであるが^⑩、その「宇宙的な大生命」にご利益をお願いするというのは、自らの生命の源流である祖霊に守護を願うのと殆ど変わらない発想であると筆者は考える。

このように伝統仏教の受容のされ方と同じように、新宗教も、本来の各教団の思惑に関わらず、受け取る側の日本の民衆のニーズと理解できる仕方でのみ受容されて来たものと思われる。

○祖霊信仰の衰退と本格的仏教普及の可能性

しかし、時代は変わり、上記のような古来の祖霊信仰の価値観そのものが、今や若い世代からは縁遠いものになりつつある。

そして、皮肉なことに、そのような祖霊信仰に取り込まれてしまった「伝統仏教」も「新宗教」も、祖霊信仰の価値観が忘れ去られるのに同調して衰退しつつあるということである。

現在、伝統仏教の檀徒も新宗教の構成員もおしなべて高齢化が進んでいる。そして、彼ら高齢者の時代には一般的であった、「先祖を祀ることによって、先祖の守護が得られる」という祖霊信仰以来の発想は、もはや過去のものとなりつつあり、今の若い世代の多くは、家の存続や先祖の守護を得ることには関心は低く、檀家の寺離れは進み、新宗教も若い世代には引き継がれにくくなってきている。

このまま次の世代に引き継がれることなく構成員の高齢化が進んでいけば、日本の仏教全体の衰退は避けられないであろう。

そのような新宗教も含めた既存の仏教界の厳しい状況とは裏腹に、仏教そのものに関する関心はかつてないほどに高まっている。先祖や仏に“守護を求める”人より、自分を見つめ直し、自分を知り、自らの人間的な成長を模索する人の方が増えつつあり、そのヒントを仏教に求めているということではなからうか。そして、「自分探し」という言葉がキーワードのように広告やポスターなどいたるところで使われるようになってきている。

本来なら、ようやく祖霊信仰というフィルターなしに仏教を人々に受容してもらええる好機が到来したと言ってもよいはずだが、これまで長年にわたって仏教が祖霊信仰と結びついて受容されてきた結果、現状の日本の仏教のあり方は、伝統仏教も新宗教もともに、今多くの人々が求めている「自分探し」の為の仏教の受け皿になってくれるとは思われていないのではなからうか。

日本の仏教は、このまま、祖霊信仰の衰退とともに共倒れ式に衰退していくのか、逆にこの好機を活かして新たに「自分探し」の為の手立てになりうる本来の仏教として次の世代に再提示されうるのか、今はその岐路に差し掛かっていると思われる。

<注>

- ① 小野澤ニッター：タイ国黒タイ族村落における祖先崇拜
東京家政学院筑波女子大学紀要第1集 P.93～P.104 1997年
- ② 池上 良正：死者の救済史—供養と憑依の宗教学 P.34
角川書店；ISBN：4047033545（2003/07）
- ③ 同上 P.23
- ④ 石黒秀治「法のみより」上巻P.11
霊友会史資料第一巻第一章4節P.317
霊友会：霊友会史編纂委員会（1988/1）
- ⑤ 石黒秀治「法のみより」中巻P.63
霊友会史資料第一巻第一章3節P.158
- ⑥ 「小谷恩師のお話」昭和43年12月5日第24支部弥勒山参拝修行にて。（採録）
霊友会史資料第一巻第一章3節P.165
- ⑦ 霊友会史（上巻）P.192
霊友会：霊友会史編纂委員会（1992/1）
- ⑧ 「小谷恩師のお話」昭和44年12月11日久保講堂における麻布支部決起大会にて。（採録）
霊友会史資料第一巻第一章4節P.540
- ⑨ 「久保恩師の覚書」霊友会史資料第一巻第一章4節P.588
- ⑩ 「隨筆（十一）」（井戸清一）『大日本霊友界報』第16号（昭和10年3月28日発行）
霊友会史資料第二巻第二章3節P.152
霊友会：霊友会史編纂委員会（1988/1）
- ⑪ 「小谷恩師のお話」昭和45年3月14日第1回弥勒山春の靈感者修行にて。（採録）
霊友会史資料第一巻第一章4節P.542
- ⑫ 「小谷恩師のお話」昭和45年6月3日第27支部弥勒山参拝修行にて。（採録）
霊友会史資料第一巻第一章4節P.544
- ⑬ 対話『人間の原点』小谷喜美・石原慎太郎 P.105-P.106
サンケイ新聞出版局（1969/4）
- ⑭ 小谷喜美著「神佛の功德」第式編P.55-P.56
霊友会史資料第二巻第二章3節P.356
- ⑮ 草田伊三郎『根性を直せ』—現代の虚空蔵と弥勒—体験仏教6 P.189
佛の世界社（1974/4）
- ⑯ 高橋審也「原始仏教における生命観」『日本仏教学会年報』第55号、1990年5月、p.19